

文化財学習会

# ふるさと探訪

テーマ 歴史資料館・菊池寛記念館と西方寺探訪

講師 藤井雄三・川畑 聡

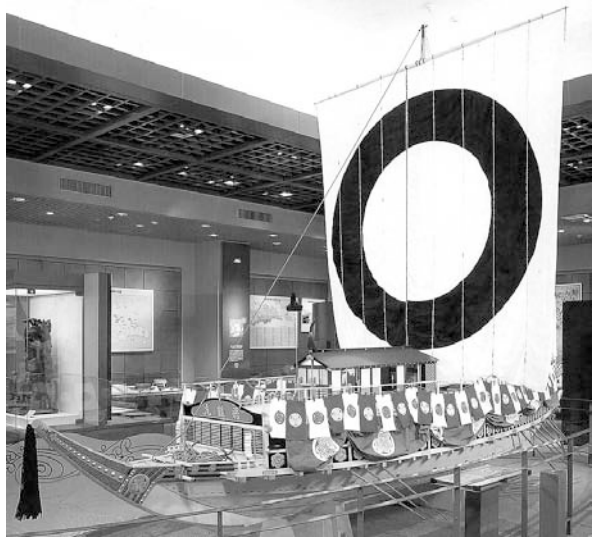
歴史資料館・菊池寛記念館 職員

(高松市教育委員会教育部文化財課)

平成20年6月22日(日)

共催 高松市歴史民俗協会

高松市教育委員会



### 【常設展示室】

## 1 高松市歴史資料館

たかまつしれきしりょうかん

高松市歴史資料館は、市民の生涯学習と文化の継承発展を目的として平成四年に開館しました。現在も伝えられる文化、また失われようとしている文化など、郷土のかけがえのない文化遺産を広く収集して、調査研究のもとに整理・保管するとともに、それらを展示して市民に公開しています。

館内には、原始から現代に至る郷土高松の歴史・民俗・考古等に関する資料を展示している「常設展示室」、歴史等に関するいろいろな知識・情報などを学べる「学習室」、一つのテーマをもとに企画展示を行う「特別展示室」があります。なお、今回は第四十八回特別展「近代香川の人物譜く菊池寛と同じ時代を生きた人々」も開催しており、ご覧いただけます。

## 2 菊池寛記念館

きくちかんきねんかん



【常設展示室】

菊池寛は郷土が生んだ偉大な文化人で、現在の文壇の隆盛の礎を築きました。

菊池寛記念館は寛の功績と名誉を末長く顕彰するとともに、文化の発展に寄与するため市制百周年事業の一環として、平成四年に開館しました。

寛は、明治二十一年現高松市に生まれ、「父帰る」「真珠夫人」など多くの作品を残しています。またヒューマニズム、リアリズムの作家として多くの読者を持ち、現在活躍の作家たちにも多大な影響を与えています。一方、作家活動以外でも文藝春秋社

の創設、「芥川・直木賞」「菊池寛賞」の設定、著作権の擁護、作家の地位向上など数々の功績があります。

### 3

## 野球踏切

やきゅうふみきり

昭和町二丁目にあるJR高徳線の踏切は、「野球踏切」として有名です。その由来については、踏切横にある看板に詳しいので、ここに説明文を掲載します。



【野球踏切 近景】

「野球踏切の由来 大正十四年八月一日神戸鉄道管理局は高徳線高松く志度間を開業した。当時、この踏切は踏切名を持たず四種踏切として通行者に供していたと思われる。その後、昭和二十六年五月二十日四国鉄道管理局は警報機を設けて三種踏切に格上げし、踏切に名称をつけることになった。その際、香川県立高松商業高等学校の野球部員達が西宝町二丁目鉄道病院西浜分院（現在の四国旅客鉄道株式会社研修センター）付近にある練習場までの行き帰りの道としてこの踏切を通っていたことにちなみ「野球踏切」と命名したものとされる。その後、昭和四十四年三月三十日日本

国有鉄道四国支社はこの踏切に遮断機を設備し現在の姿になった。この踏切がいつまでも無事故を続け、通行者に愛され続けることを望んでやまない。平成十五年九月四国旅客鉄道株式会社 代表取締役社長 梅原利之」

## 4 西方寺

さいほうじ

西方寺は、初代高松藩主松平頼重により建立された古刹です。その由来について、住職が著された「西方寺縁起」を元に、補足を加えながら説明しましょう。

西方寺は「念仏山専称院西方寺」と号し、昭和六十二年の本堂・庫裡の焼失前の本堂内陣には雲中二十五菩薩を擁した阿弥陀如来像が鎮座しており、さながら極楽浄土の様相であったと伝えています。現在の境内地は、高松旧市街の西にあたる西方寺山の高台にあり、西は五色台から東は屋島まで瀬戸内海を一望できる風光明媚な場所です。

初代高松藩主松平頼重は、延宝元年（一六七三）城下町を守る西の砦として現在地の麓に西方寺を建立し、付近を藩士の墓所と決めました。当時は麓近くまで海岸が迫っていて要害の地でしたが、高潮に軒先を洗われて困ったことから、文政十一年（一

八二八）藩主松平頼恕により現在地に移されました。

境内には、紫雲丸遭難者慰霊碑、地藏堂、穴薬師堂などの碑や堂があります。紫雲丸遭難者慰霊碑は、昭和三十年に高松港沖で沈没した紫雲丸の犠牲者百六十八名の御霊を祭っており、毎年命日の五月十一日に慰霊法要が行われています。当日には県外を含めて多数の参詣者があります。

また、西方寺の上方の山中には、日露戦争の旅順模擬要塞があります。明治三十七年（一九〇四）から開始された日本軍による清国旅順攻略では、県内出身の善通寺第

十一師団も参加し、多数の死傷者を出す激戦でした。これを忘れないために、高松市の実業家によって、東鶏冠山（ひがしけい）（ひがし）砲台を模倣して明治四十三年に造られました。

### 【紫雲丸遭難者慰霊碑】



5 西方寺 金銅誕生釈迦仏立像 (市指定文化財 彫刻)

昭和五十九年、西方寺から奈良時代の釈迦誕生仏が発見されました。奈良時代の釈迦誕生仏が、江戸時代創建の西方寺にまつられるまでの千年に近い年月、何処にまつられていたのでしょうか。このみ仏の数奇な運命がしのべれます。

像は蠟型で全身を一度に鑄て、目と眉はタガネで形づくっています。右手を頭上にあげ第一指を伸ばし、左手は地を指す「唯我独尊（ゆいがどくそん）」のポーズをして



【金銅誕生釈迦仏立像】

います。頭の上部の肉髻（につけい）は扁平で、胸から腹部にかけて張りがあります。裳（も）は自由に型どり、長くて台座までかかっています。荒れている肌は、火中にあつたことを物語っています。

四月八日の花祭にはこの誕生仏に甘茶をそそぎ、釈迦の誕生を祝福してきたことでしょう。

## 6 林竹堂・毅陸父子

はやしちくどう きろく

西方寺山門の横に石碑が建てられています。明治時代に私塾を開設し多くの子弟を教育した林竹堂（滝三郎）の碑です。

明治三十二年に建てられ、その篆額は当時、東宮侍講であった三島毅（三島中洲と号す、備中国都窪郡中島村・現在の倉敷市生。山田方谷の弟子）、撰文は現在の三重県鳥羽市出身の衆議院議員栗原亮一によるものです。

### 林竹堂

氏は賢、字は普卿、通称滝三郎、竹堂と号していました。明治二年には大坂の兵学寮に学び、いったん病を得て帰郷しますが、後に江戸に学びます。明治十五年には高松に帰り、葆真学舎を興し多くの子弟を教育しました。当初は国語・漢文を教えましたが、後に倫理、英語、数学、習字などが教科に加わりました。その門に学ぶ者常に数百人と記されています。

明治三十年春、東京に再遊しますが同十二月六日、にわか病を得て没してしまいます。享年五十歳。資性は豪放磊落で酒を好んだとされます。東京において、若き中村毅陸に遭い、高松に伴い帰郷しますが、彼こそ後に養子とした林毅陸です。



## 林毅陸

明治五年（一八七二）、佐賀県唐津市肥前町田野に生まれました。生家は造り酒屋で多くの田畑山林を所有し、炭鉱も経営するという繁栄ぶりでしたが、父・清七郎の時代に入ると没落しました。

明治十四年、九歳の毅陸は長兄・秀穂に伴われ東京に出ました。このとき秀穂と親しい友人の竹堂が東京にいたのです。その竹堂が明治十五年二月、東京での勉学生活を二年で切り上げ、郷里高松に帰って漢学塾を開くことになったので、秀穂は竹堂を自宅に招き、別れの宴を催しました。その宴席で突然、竹堂は秀穂に対し、「毅陸を私に五年間ほど預けてはどうだ、十分仕込んでやろう」と言い出しました。秀穂は光榮なことと喜び、毅陸も即座に承知しました。こうして宴席を終えて竹堂が自宅に戻る際には毅陸も同行し、その晩のうちに林家の住人となったのです。

その後、高松において竹堂の葆真学舎で学び、学僕兼小先生として、他の生徒たちを教えるまでになったといえます。明治二十二年、慶応義塾に入学するために高松を離れることとなった毅陸を、竹堂は養子としました。林毅陸の誕生です。

明治二十五年、毅陸は慶応義塾の正科を首席で卒業、卒業生中、毅陸だけが大学部へと進学しました。大学を卒業後、慶応義塾の英語教師として採用されています。そ

して、明治三十四年、欧州に留学しパリ、ロンドンなどで四年間勉学に励み、米国を経て帰国しています。明治三十八年に欧州留学から帰国した毅陸は、慶応義塾大学政治科の教授となり、欧州外交史と英国憲法を担当し、明治四十三年には政治科主任となりました。

明治四十五年、香川県から衆議院議員に立候補して一位で当選し、以後3期、衆議院議員を務めています。大正八年（一九一九）、ブリュッセル万国議院商事会議に団長として出席、次いで第一次世界大戦の戦後処理を決めるパリ平和会議に日本全権代表団の一員として出席しました。この年法学博士の学位を授与されています。大正九年、原敬首相の要請により、外務大臣に対する助言者である外務省勅任参事官に任命され、翌年にはワシントン軍縮会議に出席しています。

大正十二年十一月、慶応義塾塾長と慶応義塾大学学長として大学に復帰し、十年間その任にあたりました。林が着任したのは、九月の関東大震災から間もなくであり、復興に携わったと考えられます。その後、三田に次いで日吉台にも新キャンパスを建設し、こんにちの慶応義塾大学隆盛の礎を築いたとされています。

敗戦後の昭和二十年（一九四五）六月、昭和天皇の助言者である枢密顧問官に就任しています。昭和二十五年に没、七十八歳でした。

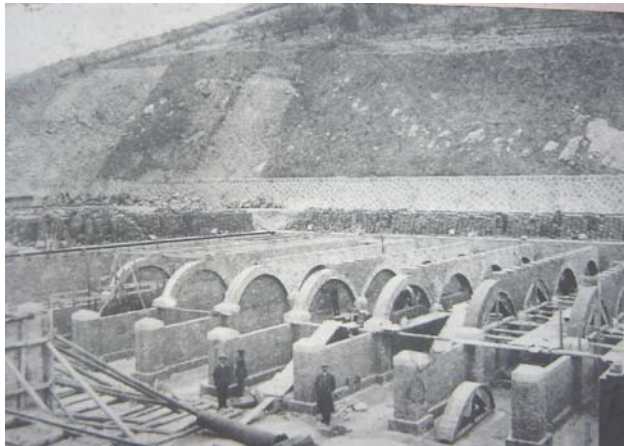
## 7 西方寺配水池と御殿浄水場

さいほうじはいすいち　ごてんじょうすいじょう

西方寺西側にある西方寺配水池は、高松市街地へ水を供給している重要な施設です。その配水池に給水をしている御殿浄水場の歴史は高松における水道の近代史でもあります。

大正三年、香川郡弦打村字御殿において、香東川河床の伏流水を水源とする御殿浄水場と、西方寺配水池および市内配管の上水道建設が着工され、大正十年には竣工して市内への給水が開始されました。

当時の御殿浄水場は、香東川に埋設した木枠暗渠一四五メートルにより取水した伏流水を、緩速ろ過池三池でろ過し、西方寺配水池より市内に配水していました。当時のデータを見ると、計画給水人口七万五千人、一日最大給水量八三四七立方メートルです。



【西方寺配水池工事風景】

その後、人口増加に伴う水量不足の解消を図るため、御殿浄水場ではたびたび拡張や施設整備が実施されています。とくに第四次拡張事業においては、御殿浄水場東側に貯水池の築造が計画され、昭和十七年に貯水池堰堤工事に着手、第二次大戦の影響で一時休止状態となりましたが、終戦後の昭和二十九年に竣工しました。これにより香東川伏流水を南部揚水ポンプで汲上げ、導水路を経て貯水池へ貯留するようになりました。

## 8

### 西方寺配水池のソメイヨシノ

（市指定文化財 天然記念物）

さいほうじはいすいち

西方寺配水池にあるソメイヨシノは、大正十年高松市水道局御殿浄水場西方寺配水池建設当時に植栽されたものと推定されており、樹木医の所見も樹齢八十年以上のことです。これら八株のソメイヨシノは雄大な自然樹形が保たれており、うち一株は臥龍様（がりゆうよう）に生育するなど、いずれも全国的に貴重な存在です。

ソメイヨシノは明治の初めに新しい品種として見出され、全国に広まりましたが、近年全国的にテングス病が広がっているため、新たな植樹には他の品種に変える場合が多くなりソメイヨシノが減少する中、テングス病の感染も見られず良好に生育して

いるのが特徴です。寿命が五十〜六十年とされる中、樹齢八十年を過ぎた現在も生育が良好であり、学術上も価値が高い桜です。

当地でソメイヨシノが健全に育っているのは、①後背地が山林であり、山林に降った雨が徐々に染み出し、桜に水が供給されたこと。②配水池であるため立入禁止区域となり、踏圧による土の硬化が防げたことおよびテングス病の感染がなかったことなどが考えられています。



【西方寺配水池のソメイヨシノ】